

- (21) 「文治五年毛越寺事」新訂増補国史大系『吾妻鏡』第三 一九六八 吉川弘文館
- (22) 『平安京図会』二〇〇五 京都市生涯学習振興財団
- (23) 能「錦木」機織る女の戸外に千束の錦木を立てた男が三年後 思いを遂げたという筋の複式夢幻能。世阿弥作
- (24) 桜井満『伝説のふるさと』一九七九 日本書籍

参考文献

- 能勢朝次『能楽源流考』一九三八 岩波書店
- (しのはら・じゅんこ)『國學院大學大学院』

全国深草少将伝説一覽

府県	住所	小町の出生地	設定について		百夜通い			小町のその後	備考(出典)		
			小町の居住地	病気	少将の動向	起点	終点			数え方	少将の結末
1 秋田	雄勝郡雄勝町小野	雄勝町	勝	抱瘡	小町を追い東下り	長鮮寺	小町宅	数え方	増水の川に落ち死亡	岩屋堂に籠り自像を刻み92才で死亡(明川忠夫)	『小町伝説の伝承世界』(明川忠夫)
2 山形	米沢市塩井	京都	京都↓奥州の父の所(米沢)	人の忌む病	小町を恨み死亡	なし	なし	植えた芍薬	恋裏れ死亡	薬師如来を祀り病死(明川忠夫)	『小町伝説の伝承世界』(明川忠夫)
3 京都	京都市左京区市原野	京都市市原野	宮中↓市原野	なし	小町に懸想	一条寺	市原野	なし	隠岐に流罪	隠遁し死亡	『伝説のふるさと』(桜井満)
4 京都	京都市山科小野御堂町	出羽	宮中↓隨心院	なし	深草の欣浄寺に住む	欣浄寺	隨心院	糸に綴る榎の実	病死	共に葬られる	『小町伝説の伝承世界』(隨心院)
5 京都	京都市勸修寺風呂屋敷町	なし	隨心院	なし	艷書を小町に書く	師団街道	隨心院	なし	寒さで死亡	慚愧から榎を蒔く	『小町伝説の伝承世界』(明川忠夫)
6 京都	京都市深草欣浄寺	なし	隨心院	なし	深草の欣浄寺に住む	欣浄寺	隨心院	なし	病死	少将も小町も共に葬られる	『小町伝説の伝承世界』(明川忠夫)
7 京都	京丹後五十河	なし	病死	不明	小町を追い都から来る	なし	なし	なし	なし	少将も小町も共に葬られる	『小町伝説の伝承世界』(明川忠夫)
8 和歌山	和歌山市岩出町住持池	根来山西坂本(桂姫)	根来山西坂本(桂姫)	なし	毎夜忍び寄る	なし	なし	なし	なし	大蛇の少将と住持池で暮らす	『小町伝説の伝承世界』(明川忠夫)
9 岡山	都窪郡清音村黒田	備中國都窪郡清音村黒田	備中國都窪郡清音村黒田	瘡	対岸に住む(金麻呂)	黒田	対岸	なし	冷えて死亡	冷性、蛭などを治す	『小町伝説の伝承世界』(立石憲利)
10 熊本	鹿本郡植木町小野	植木町小野	植木町小野	なし	立石の神社に住む	立石の神社	植木町小野	なし	小町に騙され川に落ち死亡	鬮となり晒され	『小町伝説の伝承世界』(明川忠夫)

東日本地域の寺院における八百比丘尼縁起の成立について

富 樫 晃

はじめに

東北から九州にかけ広く分布している八百比丘尼伝説のうち、南東北・北関東にかけて八百比丘尼の開基伝承と共に、その伝承を取り入れた開基縁起が現存する寺院が存在する。

福島県喜多方市にある金川寺では、八百比丘尼縁起や八百比丘尼の遺物等数点が寺宝として残されており、八百比丘尼伝説がこの寺院にとって非常に重要な役割を持つていたことがうかがえる。この寺の開基由来として、『新編会津風土記』では、若狭小浜から来た老尼が建立したという伝承が正式な縁起として紹介されているが、都から会津に流されてきた秦勝道の娘が九穴の貝を食べて長生し、この寺を建立したとの俗説が併記されている。ところが、現在寺に残されている八百比丘尼縁起等では、『新編会津風土記』で俗説とされる内容が正式な縁起とされており、先行研究では俗説が元々地元には伝わる口碑であり、先行した縁起で

あつたろうとする説と、それを疑問とする説がある。

そこで、この金川寺の縁起と、栃木、埼玉の各寺院に残されている八百比丘尼縁起について、詳細に分析し、各寺院の縁起作成の目的や年代、また各寺院地域の口碑伝承との関係や若狭小浜からの影響も含めて、東日本地域における寺院の八百比丘尼縁起成立について考察する。

一・福島県喜多方市塩川町「金川寺」縁起について

(一) 金川寺開基に関する二つの八百比丘尼伝承

金川寺は、福島県喜多方市塩川町金橋字金川にある曹洞宗の寺院である。この寺院は八百比丘尼が開基に関わったとされる伝承が残されており、『新編会津風土記』巻五十五「陸奥国耶麻郡之五」(表2, No.1参照)において以下のように記述されている。

「昔若狭國小濱より一人の老尼來たりて勝地を相し、この村の

地頭石井丹波守に請て一字を建立す、地名に因て金川寺と號せりみづから彌陀の靈像を刻て本尊とす、長二尺六寸あり住職年を経て八百歳の齡を保てり、因て世にこれを八百比丘尼と云、別に法諱ある事を知るものなし」

「又俗説に此八百比丘尼は秦勝道が女なり、勝道は秦川勝が孫にて朝に仕て諫諍し讒者のために放逐せられ、和銅元年此地に來り会津山の麓に謫居す、里長の女に相馴れて養老二年正月元日に此比丘尼を生めり、勝道かねて庚申を尊崇し村の父老を集めて庚申講を營しに、ある日駒形岩の邊鶴淵の底より龍神出て大衆を饗應す、中に九穴の貝あり、人怪て食はず道に棄しを勝道捨て家に歸る、此比丘尼探て食しゆえ壽を保てりと云、此説縁起と異なりいづれも來歴證とすべきなし」

『新編会津風土記』は、享和三年（一八〇三）から文化六年（一八〇九）にかけて、江戸幕府による各地の地誌編纂事業の一環として、会津藩自らの調査による藩領の地誌として編纂されており、藩の威信をかけて、確度の高い調査を実施した結果として、当時、金川寺の八百比丘尼開基伝承が、正規の縁起とされる伝承と共に、俗説とされる異なる二つの伝承が存在したことが確認できる。なお、後に触れる先行研究において中前正志が指摘しているように、一七世紀中頃の史料である『会津風土記』（表2. No. 2）や『会津旧事雜考』（表2. No. 3）の「金川寺」項では、『新編会津風土記』の俗説部分には触れられていない。

において、「この「俗説」先行説」に、すぐ従うわけにはいかない」とし、野村の論考で言及されていない『新編会津風土記』より時代的にかなり遡る『会津風土記』や『会津旧事雜考』の記述を例にあげ、この両文献が若狭小浜から来た尼僧によって開基されたとすることから、「むしろ「縁起」の所伝の方こそ先行していたのではと考えられるほどであって「俗説」先行説にはにわかに従えないことになろう」と野村の俗説先行説に対して反証している。ただし『新編会津風土記』以前の「俗説」に対応する伝承として、『拾推雜話』宝暦四年（一七五七）の八百比丘尼を会津出身とする記述を取り上げ、早くより八百比丘尼が会津出身である説が発生していたことを示唆しており、いづれが先行するかについては、一概には言い難く、「より公的な縁起では、若狭小浜出身という外来説、それに対して民間的な俗説では、地元会津出身という土着説、といった傾向がある程度定着していたようであることと、臆気ながらも窺わせる」としている。

さらに中前は、金川寺の寺宝として伝わる八百比丘尼伝説に関わる縁起類等の資料を詳細に紹介し、『新編会津風土記』で提起された八百比丘尼の外来説と土着説について、「いづれも明らかに、八百比丘尼を地元出身とし、『新編会津風土記』の載せる「俗説」とまさに共通する内容を伝えている。『新編会津風土記』の記載、さらには右に窺われた傾向とは裏腹に、江戸末期頃には、従前のより公的な縁起ではなく民間的な俗説の方と共通する所伝が、金川寺から発信された縁起類を覆い尽くしていたこ

（二）金川寺縁起と俗説に関する先行研究

この『新編会津風土記』における二つの金川寺開基伝承について、野村純一は「海尊・清悦以後―長寿伝承の行方」において、「具体的に示されるようにこの地での八百比丘尼伝承には二様あった。一つは若狭国小浜を拠点とする汎くに知られた話である。しかるにほかにもう一つ、すなわち「俗説に此八百比丘尼は秦勝道が女なり」とするのがあった。『風土記』はこれを「俗説」といつている。「俗説」とはいうまでもなく、もともとこれが土地での口碑、つまりは俚伝、俚譚にあったという事情を訴えるのであろう。それから推せば、要するにこちらの話が先行してその土地に行われていたとする事情を明かしているのではなからうか。そして、この「俗説」こそが、ここでもまたかの「あやしのいろくす」こと「にんかん」「仁羹」を喰ったとする一連の系譜にあったのである」と論じている。

野村は、東北地方を中心に伝承されていた海尊や清悦といった「にんかん」や「九穴の貝」を食して、長寿をなした物語の一環として、この金川寺の俗説とされる八百比丘尼伝承を捉えており、広く民間に流布していたこの物語、いわゆる俗説が先行して土地の伝承として根付いていて、若狭小浜から来た老尼の開基伝承は、寺の事情で後から作られたものではないかと考察している。

この野村純一の俗説先行説に対し、中前正志は「会津金川寺所蔵八百比丘尼伝説関係資料類―縁起に成り上がった俗説―」に

とになる」と考察している。そして、「小稿にて取り上げ紹介した史料類は、民間の俗説が、従前の公的な縁起の所伝を追い遣り、それと交替して自ら、その縁起の一部として入り込んだ、言わば俗説が縁起に成り上がった、そういう展開のあったことを窺わせるものでもあって、そうした現象の一事例としても、興味深く思われる」と結論づけている。

（三）金川寺縁起についての検証

金川寺縁起の成立については、上記で取り上げたとおり、『新編会津風土記』を基に、野村純一の俗説先行説と中前正志の金川寺資料類を分析した結果、従前の公式縁起に民間俗説が入り込み、俗説が縁起に成り上がったとする先行研究が存在する。それでは『新編会津風土記』や中前正志が取り上げた「金川寺史料類」をなどと共に、他の伝承資料も含め金川寺開基縁起の成立について検証していきたい。

（イ）金川寺開基の年代について

『新編会津風土記』には、「開基の年代詳ならず」とされ明らかになっていないが、「阿弥陀堂 境内にあり、本尊二尺六寸立像なり、聖徳太子の像を安置す、共に八百比丘尼の作と云」と、八百比丘尼が開基時に本尊の弥陀像と共に聖徳太子像も安置したことが記載されている。この聖徳太子の像は金川寺に現存しており、『塩川町史』によると、この聖徳太子像を調査した

結果、造立年代を十三世紀末から十四世紀初期頃としている。

また、『新編会津風土記』に出てくる地頭石井丹波守という人物については、金川寺史料で中前正志が紹介した「八百比丘尼略縁記」に「其後三十余年を経、弘安三年麓の里へ帰り、父母菩提のため、石井維明と共に松峰山最勝寺を建立し、弥陀・聖徳太子の尊像自ら彫刻ミ納め、又自形を作し」と石井維明という人物が、この石井丹波守に比定されており、石井維明という人物について中前は、「金川寺に所蔵されるという『石井氏法系』に「最勝寺殿知海良甘大禪定門／正応四年辛卯九月二十三日／石井左馬頭維明」と見える人物」としている。なお、最勝寺とは金川寺となる前の寺号である。こうした縁起に記されている仏像の推定造立年代や石井維明の活動年(弘安三年(一二八〇)、正応四年(一二九一))から、金川寺の開基年代は、鎌倉期の十三世紀後半と考えられる。

(口) 寺宝とされる八百比丘尼縁起等の遺物について

中前正志は前掲書において、金川寺に残された八百比丘尼関連の寺宝類のうち、江戸末期あるいはその前後頃に行われていた伝承内容を具体的に伝えているという点で、特に注目に値するものとして、以下の各史料について、概略を示している。

①「八百比丘尼御絵伝 三幅対」―掛幅三軸 裏面に明治四十一年修復の墨書 制作時代不明ながら江戸末期頃の制作か。各幅共に上から下へと縦に四つの場面を並べて描き、

計十二場面となる。

②「八百比丘尼由来伝書 一軸」―卷子本一軸 江戸末期頃写本 全一八〇行に亘って八百比丘尼の由来を漢文体で記している。八百比丘尼の由来であるが、それがそのまま金川寺の創建縁起ともなっている。

③「八百比丘尼略縁記 木版一枚」―一枚刷(表1. No. 1参照) 江戸末期頃の作成か。基本的な内容は「八百比丘尼由来伝書」と共通しているが、「八百比丘尼由来伝書」にはない要素も少なからず見られる。

④「八百比丘尼畧縁記箱入 一本」―「八百比丘尼略縁記」とほぼ同文。

中前は、この金川寺所蔵史料のうち、「八百比丘尼由来伝書」と「八百比丘尼略縁記」を比較し、「八百比丘尼略縁記」について、「基本的な内容は「八百比丘尼由来伝書」と共通しており、「八百比丘尼由来伝書」を基盤の一つとして作成されたのかもしれない」としながらも、「八百比丘尼略縁記」の「八百比丘尼由来伝書」との相違点を以下のとおり挙げている。

「八百比丘尼由来伝書」に色濃く見られた阿弥陀信仰と太子信仰がかなり後退している。一方、「八百比丘尼由来伝書」とは異なる要素、「八百比丘尼由来伝書」にはない要素も少なからず見られる。たとえば妙蓮が帝から紫衣を賜ったことや、自らの像を造立したこととその像の利益などは、「八百比丘尼由来伝書」にはない。

後掲の『会津風土記』や『新編会津風土記』の所伝にも見られないこれらの要素は、しかし、現に金川寺に伝来する先引「八百比丘尼御袈裟」や安置される先述の八百比丘尼立像と対応するものであって、庶民に向けた略縁起にあつては、是非とも盛り込まない内容であったことだろう。また、石井維明と共に松峯山最勝寺を建立したというのも、「八百比丘尼由来伝書」にはない

この中前の指摘した内容を見ると、「八百比丘尼略縁記」が作成された事情が見えてくる。それは、寺宝である八百比丘尼像や紫衣のご開帳による勧進を主な目的として「八百比丘尼略縁記」が作成されたと思われるからである。また、石井維明建立の件が「八百比丘尼略縁記」のみにあるのは、『新編会津風土記』の正規の縁起とされる小浜老尼開基の縁起を反映していると思われるべきであろう。

(ハ) 寺院開基における比丘尼の関与

金川寺が八百比丘尼によって開基されたとされる十三世紀後半から十四世紀前半にかけて、関東周辺に居住していた御家人が各地に持つ領地支配強化のため、領地に現地入りし、その領地に領主の信仰する寺院を建立するなど、新たに寺院が造られるということが多かったと考えられる。

同時期に、同じく八百比丘尼が開基に関わったとされる下記渡羽茂の「熊野神社」のケースは、開基に関わる史料や伝承が残っており、比丘尼が関与する寺社開基の参照となると思われる。

新潟県佐渡羽茂の「熊野神社」(旧称熊野権現)は、鎌倉時代末期元享二年(一三三二)の年号が入った古い棟札が残っており、この棟札の記載に、熊野神社の殿内として、八百比丘尼生家の伝承がある藤井田屋家の人物がいる。この棟札には、熊野神社建立の寄付を行った人物として、羽茂領主本間氏一族が名を連ねているのとともに、「禪定比丘尼妙道は用途十貫」と書かれ、開基に際して地元領主と比丘尼の関係性を示すものといえる。この熊野神社について、由来の聞き書きとして、明治三十四年『熊野神社旧記取調書』「当社合殿傳説」には、藤井田屋家独自の八百比丘尼に関する伝承が含まれている。その中で、当時開基に関わった比丘尼の活動が垣間見られる内容が含まれている。

一 比丘尼妙道ハ何国之産、何年間之生年共不知、往年藤井甚太郎二飯住居諸国ヲ遍曆シ、佐渡江帰住之時甚太郎六代之孫ニ対面スト傳説アリ。此故ニ、是ヲ郷里之人今ニ八百比丘ト唱フ。

一 俗説ニ曰ク、熊野神社之開基本願ハ必ス八百比丘尼、宮殿建立ハ飛弾内匠ニ相違ナキノ事ト古老之傳聞説アリ云々。

この記述からは、開基に関わった禪定比丘尼妙道と称する比丘尼が八百比丘尼と比定されたのは、開基時ではなく、現地有力者に仮住まいして有力者が何代か代替わりして後の時代であり、この比丘尼が、出身不明で、死所も不明であったことがわ

かる。この藤井田屋家には、別に八百比丘尼伝説の定型となる、「田屋家の子女が人魚の肉を食べて不老不死となり、諸国行脚しながら年月がたった後帰郷する。その後若狭小浜に行き八百歳の折、空印寺の岩穴にて最期を遂げる」といった伝承も広く知られていることから、『新編会津風土記』における金川寺の縁起と俗説の関係といったところかもしれない。

また、中前が、『新編会津風土記』以前の「俗説」に対応する伝承として、『拾推雑話』宝暦四年（一七五七）の記事中で、小浜の町民の会話の中で八百比丘尼の出身を会津であるとする記述を取り上げているが、大正十一年『佐渡國史』には、若狭彦神社宮司談として若狭にも八百比丘尼が佐渡の人であるとの伝承があるとしており、各地の伝承が小浜に逆輸入されていることを示している。

必ずしも、この佐渡のケースと金川寺のケースが当てはまるとは限らないが、こうした同時代の比丘尼の活動記録から、地元の有力者の建立する寺院において、勸進比丘尼が寄進し関与していったことが、当時広く行われており、金川寺の開基にも深く関わっていたと考えられるのである。

『新編会津風土記』や金川寺に伝わる縁起の記述や仏像の年代から、金川寺の開基は十三世紀後半から十四世紀前半であり、この開基には地元有力者である石井氏を中心に、勸進比丘尼が関わっていたという伝承が開基縁起として最初に作り上げられたと考えられる。ただし、勸進比丘尼は当時八百比丘尼と最初

思われ、安政七年（一八六〇）『眞名古舊傳夢物語』に元々の「五大尊大権現縁起」のストーリーの片鱗を見ることが出来る。

（二）八百比丘尼縁起作成の動機

『伝説八百比丘尼』の解説にあるとおり、この『五大尊八百比丘尼縁起』作成の動機として、地福寺の八百比丘尼本堂修復の勸進があった。この縁起に添付されていた勸進帳は表1、No2を参照。

『五大尊八百比丘尼縁起』にある地福寺については、『眞名古舊傳夢物語』に地福寺創建の記載があり、「天文年中頃、強賊の為に焼尽致して、後に水木に一寺を建て「普賢山・真久寺」と号す。猶又消失して、其の後寛永年中に今の古寺中に移して「愛宕山・持福寺」と号しける。其の後、「持福寺」は隣家遠くして度々盗難に逢いし故、享保年中に、今の地に移すなり。又文政年中焼失せり。」と不幸に逢うたび移転を繰り返して、寺名を変えてきたようであり、縁起作成時は、山名は変わらず、持福寺から地福寺と名称を変えたものと思われる。また勸進帳では「真久院」となっており、縁起作成時より更に寺名が変わったものであろうか。この勸進帳は安永四年以降の何らかの災害により、大破した八百比丘尼堂であるが、寺院の財政が窮乏しており、修理する金銭に困った際に出されたものであろう。

から呼ばれていたわけではなく、佐渡の事例のように、あるいは生国さえわからない人物であったかも知れない。この比丘尼が後に若狭小浜から来た八百比丘尼として比定されたと考えられ、このときに影響を与えたのは、開基から数百年後に若狭小浜から来た宗教者ではないだろうか。

二、栃木県栃木市西方町眞名子「八百比丘尼堂」縁起について

（一）眞名子「八百比丘尼堂」に関する八百比丘尼伝承

栃木市西方町眞名子には、「八百比丘尼堂」があり、この堂宇にまつわる八百比丘尼縁起がある。その『五大尊八百比丘尼縁起』(表1、No2)は安永四年（一七七五）に八百比丘尼堂を管理していた地福寺住職の寛海が以前からあった寺の縁起を写したものとされる。この成立について、『伝説八百比丘尼』西方町の解説によると、『五大尊八百比丘尼縁起』は、表題のとおり、元々は「五大尊権現」の縁起だったのではないかと思われる。それが何時の頃からか「八百比丘尼物語」と同化した形で一般に流布していたものである。本書は地福寺の本堂修復の勸進帳のために、寺に伝わる縁起から「八百比丘尼縁起」を中心に置いた形で当時の住職であった寛海がまとめたものを、名主の嶋田平右衛門が写しとったものと思われる」と考察している。

多分、考察のとおり「五大尊権現縁起」から八百比丘尼の物語のみ抜粋されたものが「五大尊八百比丘尼縁起」であると

（三）『五大尊八百比丘尼縁起』成立まで

『五大尊八百比丘尼縁起』は、『伝説八百比丘尼』解説にあるとおり、元々「五大尊権現縁起」が存在し、新たに八百比丘尼物語が融合したものが縁起として存在し、それを抜き出したのであろうという見解は妥当なものと思われる。『眞名古舊傳夢物語』に出てくる八百比丘尼の父である朝日輝命の物語は、東北地方に伝承されている「朝日長者」のモチーフを受け継いでおり、元来「五大尊権現縁起」とされるものは、この物語がベースであった等と考えられる。

『五大尊八百比丘尼縁起』の中で、若狭小浜の影響を受けていると思われる箇所が以下のようにある。

「若狭小浜と言ふ所に住まい給いしが、つくづく無情の理を觀じ、厭うべきは人間、ぜひ願うべきは西方にありと宣い、自ら御姿を作らせ給い、一体は即ち眞名子の里に送り、一体は若狭に留め給い西に向かい合掌端座し、『若有聞我名、願求子易産、疱瘡得安穩、一切如意樂』と誓願し、人皇四十七代淡路院帝天平宝字五辛丑年八月廿五日午の刻に、寿算八百才にて入水して寂を示し給い畢んぬ」

ここに記載されている八百比丘尼像は、若狭小浜にも同じものが一体存在するとする。会津街道を通じて近い距離にある金川寺

縁起と、八百比丘尼の父が京から流されてくるなど共通点が多く、この地域に伝承されていた「朝日長者」等の説話のモチーフに影響を受けている可能性がある。また双方、八百比丘尼像を寺宝の中心とした縁起構成となっており、八百比丘尼像開帳による勧進を期待したものと見えよう。度重なる不幸により、寺院移転をたびたび迫られ、財政が逼迫している寺院にとって八百比丘尼伝説は、貴重な収入源と見なされたと思われる。

三、埼玉県さいたま市「慈眼寺」縁起について

(一) 慈眼寺縁起と『新編武蔵国風土記稿』

埼玉県さいたま市水判土にある慈眼寺は、天台宗寺院として、第三代天台座主慈覚大師円仁が天長三年（八二六）に開山し、江戸初期に慈眼大師天海大僧正の弟子円海上人が中興したされる。

『新編武蔵国風土記稿』巻之百五十四（表2、No.4参照）には、享保年間、慈眼寺において八百比丘尼由来の黄金仏が土中から発掘され、秘仏として八百比丘尼の守護仏とされたこと、八百比丘尼の由来について記載されている。この『新編武蔵国風土記稿』記載の基となる慈眼寺縁起が残っている。（表1、No.3参照）この『新編武蔵国風土記稿』が書かれた百年前の『八百比丘尼縁起』では、享保に土中から発掘された地蔵仏の状態と、八百比丘尼が書いたとされる碑にかかれた文字及びこの延命地藏尊にいかにか御利益があるかを切々と綴るものである。しかしながら、

来とする延命地藏尊縁起に、新たに縁起を創作し付け加える事を諦め、八百比丘尼の出自等、来歴の縁起を全て小浜神明宮の縁起に委ねたと思われる。こうして慈眼寺に小浜神明宮縁起が残され、『新編武蔵国風土記稿』後段は、小浜神明宮縁起を基とした八百比丘尼来歴が記述されたと考え得るのである。

四、各寺院の縁起成立における若狭小浜の影響について

(一) 小浜から発信された八百比丘尼縁起の全国展開

拙稿「八百比丘尼伝説の成立について―江戸初期の若狭小浜を中心に―」で、十八世紀初頭より、若狭小浜の「神明宮」や「空印寺」など自らの八百比丘尼の事跡を勧進の目玉として、各地に勧進を行った際に、自らの縁起に基づき地元他の伝承を付加させた八百比丘尼伝承を各地の寺社や有力者に付帯させたことが、この伝説の全国展開に繋がったとの論考を試みた。

『拾雅雑話』明和元年（一七六四）「寺社」の項では、「古来より有所の像は八尺五分斗。元文五年に改め作るは壹尺四寸也。此時初て縁起を作る。宝曆九年京都にて開帳あり、比丘尼は僧形故社家はを忘れて八百姫と称す」と、元文五年（一七四〇）に新たに八百比丘尼像を作り、同時に縁起を作り、宝曆九年（一七五九）に京都で開帳したとする記述がある。像を新たに造り、縁起を作成してから京都の開帳まで、十九年の年月が経っており、その間に新たな像の開帳等の行動を起こしていないと

『新編武蔵国風土記稿』後段にある八百比丘尼の来歴がすっぱりと抜け落ちているのである。それでは「八百比丘尼縁起」と『新編武蔵国風土記稿』の間、百年のうち、慈眼寺で八百比丘尼の来歴を加えた新たな縁起を整備したのであるうか。現在慈眼寺に残るものにそのようなものは無く、代わりに宝曆三年（一七五三）に記された「若州小浜神明宮主 菊地肥後守橋朝臣『八百比丘尼縁起』」表1、No.4参照、つまり若狭小浜神明宮の縁起が残っているのである。

(二) 慈眼寺に小浜神明宮縁起が残った理由

ではなぜ、一見慈眼寺と関係の無いように見える若狭小浜神明宮の縁起が慈眼寺に残されているのであろうか。おそらく、自らの延命地藏尊縁起を補充するために、若狭小浜神明宮の縁起を購入したものではないだろうか。

『新編武蔵国風土記稿』後段の「或は云彼尼は若州小松原の産なりしが、幼時父海濱に釣して怪き魚を得たり、即ちこれを食はしめしに、夫より年を重ねといへども、容貌衰へず、同國後瀬山の麓空印寺境内の岩洞に隠れ住、遂に八百歳に及ぶ、故に人呼でかく名付くと」と記された八百比丘尼来歴は、「又一説に白比丘尼は若狭国小松原の人なり。父有時つりをたる。人魚の形を得たり。是異物成とすつ。女子ひろひ食ふ」とする小浜神明宮縁起と対比され、明らかに小浜神明宮の影響を受けていると思われる。つまりは、慈眼寺は、自らの八百比丘尼の由

は考えられず、実際にさいたま市「慈眼寺」に現存する神明宮の八百比丘尼略縁起の日付は、京都開帳以前の宝曆三年（一七五三）であり、若狭小浜から、日本海を利用し、越後から陸路東北、関東方面に対して新たな像の開帳と略縁起販売を行っていた可能性は非常に高いと考えられる。

久野俊彦は「縁起のメディア―開帳における縁起」において、開帳が盛んに行われたのは江戸時代中期以降であり、「近世の開帳では、狭い堂内に多くの人々が金銭を納めて参詣するという効果的な収益のために、縁起が利用された。開帳では、多くの人々に対して、開帳本尊や宝物の縁起をエトキして聞かせ、それを記した略縁起の小冊子を大量に販売し、あわせて絵伝による縁起の絵解き上演もあった。開帳の期間中は、入れ替わる人々に対して、典型的な短い縁起が繰り返し語られたから、縁起は広告コピーであった。つまり、開帳は縁起によって構成されたマスメディアなのであった」とする。小浜「神明宮」や「空印寺」といった寺社により発信された八百比丘尼縁起等の全国展開は、この縁起マスメディア化の先駆けだったともいえよう。

(二) 小浜発八百比丘尼縁起の東日本地域寺院への影響

こうした若狭小浜からの勧進活動に際して、地方拠点とすべく、佐渡の事例のように、かつて勧進比丘尼が勧進したという伝承の残る寺社や関連する地元有力者に八百比丘尼出自伝説を付加させ権威付けを行ったことが、各地の伝承からうかがえる

が、東日本地域の寺院にも若狭小浜の勧進活動の影響があったと考えられるのである。

各寺院若狭小浜の影響が認められると思われる事例として、埼玉県さいたま市慈眼寺に残されている小浜「神明宮」縁起の書き出し部分が、金川寺所蔵「八百比丘尼略縁記」共に、四十二代文武天皇の御宇となっており、また名前は異なるが秦一族が八百比丘尼の出自とされている。異人に誘われて、異郷で欲待された際に、不老不死の食物をもらい、娘が誤って食べるというストーリーも共通性を持っており、金川寺の縁起が若狭小浜発の縁起の影響を受けていると思われる。この金川寺の八百比丘尼縁起の成立については、先行研究の検証、金川寺の縁起の変遷、同時代の他地域の実例を参照として考察していくと、金川寺縁起の形成は以下の段階を経ていったと考えられる。

○十三世紀後半から十四世紀前半

地元有力者石井氏が新たに寺院（金川寺の前身最勝寺）を建立。その際に勧進比丘尼が寄進等を行い、当地を根拠とした廻国を行うが、その後の戦乱等により一時期途絶える。

○十六世紀後半から十七世紀前半

若狭小浜から日本海ルートで八百比丘尼伝承を持つ廻国の宗教者が接触。開基当初の勧進比丘尼が若狭小浜から来た八百比丘尼に比定される。これが『新編会津風土記』小浜老尼を開基とする正規の縁起となる。その後、開帳による

収入源確保のため、若狭小浜から持ち込まれた縁起を参考として、自らの縁起を作成。このとき作成された縁起が、「八百比丘尼略縁記」であり、『新編会津風土記』記事の俗説がこれにあたる。また、同時に縁起に対応する八百比丘尼像や袈裟などの宝物を作成した。その後、さらにストーリーの独自性を高めた「八百比丘尼御絵伝」、「八百比丘尼由来伝書」等の縁起が作られていくこととなった。

金川寺縁起の先行研究において、八百比丘尼の出自が、より公的な縁起が若狭小浜出身という外来説と、民間的な俗説として地元会津出身という土着説という二つの説が提示されていたが、検証の結果、両説とも若狭小浜から持ち込まれた情報や縁起が基本となっていると考えられ、特に土着説での、元々八百比丘尼伝承が現地の民間伝承であったとする説は否定されるかと思われる。

また、真名子「八百比丘尼堂」縁起においても金川寺と同様、十八世紀に入ってから、若狭小浜から来た八百比丘尼関連事物開帳により勧進を行う宗教者に触発され、八百比丘尼像を新たに作成し、これまでであった「五大尊縁起」に手を加えた縁起も同様に作成したことが、「五大尊八百比丘尼畧縁記」に繋がっているのではないだろうか。

さいたま市「慈眼寺」については、小浜「神明宮」が開帳と略縁起販売を東日本地域に対しても行っていた証拠として、現存する略縁起は非常に貴重な史料であるといえる。そして、開帳する

自らの寺宝来歴の補充資料として、これをそのまま利用したという点において、前二寺院の独自縁起作成とは異なるが、前二寺院が、「朝日長者」等、縁起創作のベースとなる地元伝承があったが、この地域ではベースに出来る伝説等が希薄だったのかもしれない。

五. おおひめ

東日本地域に八百比丘尼縁起が残る三寺院の縁起成立について分析してきたが、これら三寺院が、若狭小浜から八百比丘尼伝承を使って勧進目的に廻国する宗教者と接触した際の対応は三者三様であることがわかった。

若狭小浜から日本海ルートを使って、八百比丘尼伝承を持つ勧進目的の廻国宗教者が、江戸を中心として東日本地域の拠点で活動していたことは、各地の伝承等の検証で明らかになりつつある。その勧進活動は、八百比丘尼関連事物の開帳や略縁起等の販売を伴っており、寺宝の開帳等の活動は江戸時代中期に江戸周辺地域の人口増大と共に、大量消費時代を迎え、収入源確保の為、各地の社寺でも活発に行われていた。こうした時代を迎え、若狭小浜から提示された「八百比丘尼」というコンテンツが、収入源確保に悩む寺院にとって非常に魅力的に映ったに違いない。他国からもたらされた縁起や宝物といった情報を取り込み、自らの情報に加工して独自に勧進活動を行ってきた寺院ではあるが、八百比丘尼の来歴等で完全に小浜を消し去る

ことが出来ず、独自縁起の中に小浜との関係が垣間見えることとなった。それだけ若狭小浜が、八百比丘尼伝承のブランド化を積極的に進め、すでに八百比丘尼伝承の権威のある土地として各地に浸透していたという証であろう。

参考文献

久野俊彦「縁起のメディア―開帳おける縁起」『寺社縁起の文化学』

二〇〇五 森話社

塩川町教育委員会編『塩川町史』第七巻民俗・文化編 二〇〇五

塩川町

富樫晃「八百比丘尼伝説の研究」―佐渡の伝承と「田屋」をめぐる―『口承文芸研究』第三十九号 二〇一六 日本口承文芸学会

富樫晃「八百比丘尼伝説の成立について―江戸初期の若狭小浜を中心に―」『口承文芸研究』第四十三号 二〇二〇 日本口承文芸学会

中前正志「会津金川寺所蔵八百比丘尼伝説関係資料類―縁起に成り上がった俗説―」『日本宗教文化史研究』第9巻第2号

二〇〇五 日本宗教文化史学会

野村純一「海尊・清悦以後―長寿伝承の行方」『口承文芸研究』第

六号 一九八三 日本口承文芸学会

廣瀬文子「埼玉伝説考―八百比丘尼と平将門伝説に見る文化特性

―」『埼玉大学 国語教育論叢』第六号 二〇〇三 埼玉大学国

語教育学会

誇れるまちづくり21人委員会編『伝説八百比丘尼』一九九八 西方町

（とがし・あきら／昔話伝説研究会）

		宝鏡を奉納あり、剃髪染衣となり「英雅禪尼」と戒名し行衛を雲水にまかせて立ち出で給いぬ。それより、若狭小浜と言う所に住まい給いしが、つくづく無情の理を觀じ、厭うべきは人間、ぜひ願うべきは西方にありと宣い、自ら御姿を作らせ給い、一体は即ち真名子の里に送り、一体は若狭に留め給い西に向かい合掌端座し、「若有聞我名、願求子易産、痲瘡得安穩、一切如意樂」と誓願し、人皇四十七代淡路帝天平宝字五辛丑年八月廿五日午の刻に、寿算八百才にて入水して寂を示し給い畢んぬ。今は漸く、長者屋敷・糠塚・庚滝・姿見の井等、その旧跡のみ残り。哀れ痛ましき有様なり。然るに痲瘡・安産・求子等の祈り、効あらずと言うことなし。豈、丹精を抽んで寿福を祈らば感応空しからんや。 野州都賀郡真名子村 別当 地福寺
		勸進帳 抑々当寺は五代尊八百比丘尼の靈堂なり。然るに今般八百比丘尼の本堂大破に及び、建立自力には叶え難く、諸檀家に勸化を乞い、本堂の再興相願ひ候。之により、「若有聞我名、願求子易産、痲瘡得安穩」の為に、万人講を相勧め、多少によらず寄付助力によりし際には本堂成就なるべし。且つ、痲瘡・安産の祈り・利益の為に此方より之れを出し候。吾伝心寄付の御方の御姓名を此の帖へ御記し成る可く候。 宝前に於いて諸檀家の永き安全を祈るべく候也。 野州 真名子村 愛宕山真久院 水木 ながや
3	享保 8 年 (1723)	水判土慈眼寺『八百比丘尼縁起』慈眼寺所蔵。廣瀬文子「埼玉伝説考—八百比丘尼と平将門伝説に見る文化特性—」より引用
4	宝暦 3 年 (1753)	若州小浜神明宮主菊地肥後守橋朝臣『八百比丘尼縁起』慈眼寺所蔵。 当神明宮末社八百姫の濫觴を訪ぬるに、人皇四十二代文武天皇御宇に、当国に秦の通鴻といふ人有、或時友にいざなはれ海辺に至る。友はいく少し目をとじ給へと。諾してとゞ。目をひらけば高袤百丈の金閣なり。世に見ざる処の莊嚴なり。各礼儀をわけて饗応甚珍膳なり、まじ臚板を取よ、是魚此所にも稀なる物成。何とふをすすめん為に招けり。是を食ふもの長生不死なりと。見るに七八歳の人なり。是をあぶりあとふ。道満は人間成事を怪しみ、くらはずして懐にす。饗応をわけて暇を乞ふ。忽にもとの河辺也。此時は海宮成事を知れり。家に帰り甚酔臥す。時に女子一人有。いつも他へ行帰ればみやげを乞ふ。父臥す枕もとに鼻紙有。ひらけば一物あり。女子食ふ。父醒て尋ぬるに我くらへりという。父のいはく汝長生すべし是竜宮の珍物也。或は云、父山に入る。異人に逢う。ともに一所に行別世界、一もつをあとふ。父はくはずして懐に入扉る。女子是を食ふ。又一説に白比丘尼は若狭国小松原の人なり。父有時つりをたる。人魚の形を得たり。是異物成とすつ。女子ひろひ食ふと。復一説に若狭国三方郡興道寺村の人、父は天仙と成りて、白樺山のみもとに住と。説々多といえども我が家の伝と異り、女子年を経といへとも常に二十斗のごとし。容顏美麗面背甚白し。世にたぐひなし。人挙りて婚姻を望めども嫁せず、花鳥使日々に到る。此事を厭い自ら除髪して尼となる。其より國々を遊行し、靈仏靈社を拝し、或は破壊の社有は是を修造し、或は仏を再興し、道路あしき処には橋をかけ、水なきところには水をさぐり、木なき処には木を植ゑ、其跡甚多し。世に若狭の白びくといへり。何の名といふ事をしらず。ここに後瀬之山つづき、南西の翠微に、天照皇大神・豊受皇大神の社有。尼此処に柴の庵を結び、朝夕に齋奉りしに日く、此間幾百年といふ事をしらず。長生の人と聞及ぶに任尋来拝するもの多し。年いくつととへば文武天皇の御時生しと答ふ。容貌を見れば二十斗に見ゆ。長生の道をとへば、七情をはなれ、人のましはりをやめといふ。其後吾影をのこし、何国に死去といふ事をしらず。或説にいふ。小浜町の橋にてころびしゆへに、いまに藁橋といふ。別此橋の石、丹波の国より自負来といふ。其石城中に有之也。其日又武田の城中の岩穴に死すと。人□□りて尋ぬるに尼を見るものなし。此岩穴小浜空印寺に有之。然者天上するか地に行か今に存在するの委曲知がたく、世に八百比丘尼といふは、去りし時分と生まれし時分とを考へて八百余年になれば、八百比丘尼といふ也、家に伝る処、あらあ是ををしるし、己下寿命神にて都鄙遠近の人々今に歩をはこぶ事綿々たり。

表 1. 寺院縁起一覧

No.	和暦西暦	文献	内容
1	不明	金川寺所蔵『八百比丘尼略縁記』中前正志「会津金川寺所蔵八百比丘尼伝説関係資料類—縁起に成り上がった俗説—」より引用	「奥州会津金川八百比丘尼略縁記」 抑当寺の開基八百比丘尼の由来を尋るに、人皇四十二代文武天皇の御宇、諸国凶變有て、帝是を悩ませ給ふ。爰に秦の勝道とて、朝廷補弼の忠臣有り。深く是を嘆き、仁政を施し天下泰平ならん事を奏聞せしが、佞臣の讒奏に遮られ却而勅勸を蒙り、和銅元年会津更級の庄麓の里に流罪せらる。村民勝道の仁徳を慕い、村長の女を以て勝道に娶す。養老二年正月元日に一女を産り。名を千代姫と号け、父母寵愛不淺。其頃村民庚申を信する講中あり。勝道も講中に有けるが、ある時、庚申神老翁と化し其講中に加り玉ふ。翁の日、次の講我方へ參るべしとて、其講に当る日、駒形山の下、権現堂淵の水底に誘へば、竜宮浄土に至る。時二九穴の貝を以て講中に饗応し、式礼畢。又、龍神の水火難除の護を下し給ふ。講中頂戴し、元の淵に帰り、九穴の貝を靈物なりとて、皆淵に捨る。勝道独り靈境の珍物なりと捨てずして、帰館しける。姫、庚申講の土産を乞ふ。父、袂より一包を与ふ。姫、悦び食しける。嗚呼不思議なる哉、小女にして忽聰明叡智になり給ふ。其後、父臨終の砌、生者必滅の理を觀じ、難髮染衣の身となり、念仏三昧に天下を遍歴し、諸の神變を顕し、後嵯峨院の御宇、世に痲瘡疫病流行し、寛元四年勅命を蒙り、都におゐて諸病退散の法を修し、悉く衆病消除し玉ふ。帝敬感しまして、妙蓮比丘尼と勅号し、紫衣を宣下玉ふ。其後三十余年を経、弘安三年麓の里へ帰り、父母菩提のため、石井維明と共に松峰山最勝寺を建立し、弥陀・聖徳太子の尊像自ら彫刻ミ納め、又自形を作り、村民に告て日く、常に朕名を唱ふる輩ハ、短命を転じて長命ならしめんと誓約し給ふ。御哥に 八百歳の信をここに残しておく誓ひを結ぶ後の世の人 と詠し玉ふ。誠に法尼の誓ひ空しからず、一度此尊像を拝礼する輩ハ、無病福寿ニして書願成就せすといふ事なしと松峰山 金川寺
2	安永 4 年 (1775)	栃木県西方町『五代尊八百比丘尼畧縁記』西方町「伝説八百比丘尼」より引用	抑々、当山は人皇十代崇神天皇十年癸巳九月九日、初めて四道將軍派遣の勅下ありて、これにより四海を治め給う。然るに東海道將軍、武淳川別命の或夜の御夢に、国鬘の老翁五人来て告げて宣わく、「吾々は地神五代の神なり。紫雲たなびくの地に和光の璽を求めなば國泰かとならん。疑うことなかれ。疑うことなかれ。」と三度示して消えぬ。將軍、夢覺め「不思議なり。」と訪ね見させ給うに、此の所に紫の雲氣五カ所に虹の如くこの地を握り竅を穿ち給うに宝劍五振を得たり。斯れを御門へ奏し、叡覽に供えければ、「是れ疑いもなく地神五代の尊の神靈ならん。急ぎ彼の地に宝殿を建て御劍を納め、五代尊を崇むべし」との勅命を蒙り、朝日輝命・入日女命は御神体を守り奉り、社頭の建立に金銀美を尽くし、速疾に成就したり。扱、兩脚この地に留まり、昼夜の祭祀怠らず、上下の志が都合敵重なれば、天下穩やかなること年久し。然るに兩脚は庚申の時日を信じ、家富み榮耀す。斯かるが故に、俗呼びて「朝日長者・夕日長者」と号せり。朝日長者夫婦の或る夜の御夢に現れしは、左右に日月輪を握り給う猿田彦の神なり。深信を感じて、寿福を授かり「懐中に入る。」と宣うとみて身重くなり、崇神五十年壬午八月二十五日卯の刻に女子誕生あり。御名を八重姫と申す。父母の寵愛淺からず。姫五才の御時、何国ともなく貴相の老翁来たり、長者に向い、「君は庚申を祭れり、吾もその神を信ぜり。いざ、我が庵に来り侍に拝し給え。導師申すべし」とて、先に立ちて遙かに深溪を過ぎ、僅かの茅屋に着きぬ。終夜浮世の善惡を語るべしと一間に請じ「是は九穴の蝶とて延寿の靈薬もなしにせん」とて赤子の腫物を刻みだせり。長者、肝を潰して直ちには食わじと、食べようにして氣もそぞろに家に帰りぬ。八重姫は父の帰りを待ち受け、袖袂を探して彼の背の一品を何となく口に含み給う。父は周章で「然々と語り給えど、はや腹中に入りけり。是非なく、手洗ひ口濯ぎ杯して過ぎぬ。ふしぎなるかな、程なくして十五・六才の如く見え給う。容貌美しく、比いなき賢さ、何事も学ばざるに知るなり。嫁を雲のうえより告ぐれども、ひたすら浮世を厭わせず給うに、美人天に隠れなく、程なく帝より請われければ、いと煩さく思われけん、二首の歌形見を残して姿を隠し得見え給わざりし。その歌に日く、 ◀昔より 約束なればもはしかの 病むとも死なじ 神垣のうち><一切衆生 深き昔の契りにや 余を思うを 身を思う程>と詠じ、斯して深山幽谷に住み家とし、年経たれどもその身は元の如し。しかれども、世の味気なきを觀じ、十万本の杉を植えて末世に面影を残さんと誓い、今猶、諸国に枝葉盛りに榮え侍りぬ。凡そ寿算七百才にて、人皇三十八代齊明天皇七年辛酉、さすが古江懐かしく思召し、立ち帰り見給えども更に知る人も無く友も無し。神は昔に変わらせ給わねど、時移り世代りぬれば、宮殿樓閣神宝も退転し、無きが如きの小社と神迹の縁さえ年経る旧跡となりければ、落涙袖を絞り、悲嘆袂に洩れ給い、人間の長寿は万宝の随一なれども、斯く浅ましく儂きものよと、五代尊の御社に

表2. 地誌等史料一覧

No.	和暦 西暦	文献	内容	概要
1	享和3年 (1803) ～ 文化6年 (1809)	『新編会津風土記』卷五十五「陸奥国耶麻郡之五」	金川寺 境内東西三十一間南北十五間年貢地 村中西類にあり、松峰山と號す、曹洞宗会津郡南青木組青木村惠倫寺の末山なり、開基の年代詳ならず、昔若狭國小濱より一人の老尼來たりて勝地を相し、この村の地頭石井丹波守に請て一字を建立す、地名に因て金川寺と號せりみづから彌陀の靈像を刻て本尊とす、長二尺六寸あり住職年を経て八百歳の齡を保てり、因て世にこれを八百比丘尼と云、別に法諱ある事を知るものなし、又此寺の前に鶴淵と云淵あり、其側に大なる奇石二つ並べり、其形状奔馬に似たり因て歌あり、 詠人不知 会津山麓の里の阿彌陀堂霞かくれの鶴淵の駒 縁起の載する所斯の如し、此寺昔は村の辰巳の方十町餘を隔て堂島川の南にあり天正巳丑の亂に兵燹に罹て後此地に移せりと今猶礎石あり此所の前に淵あり即ち鶴淵なり 又俗説に此八百比丘尼は秦勝道が女なり、勝道は秦川勝が孫にて朝に仕て諫諍し讒者のために放逐せられ、和銅元年此地に來り会津山の麓に謫居す、里長の女に相馴れて養老二年正月元日に此比丘尼を生めり、勝道かねて庚申を尊崇し村の父老を集めて庚申講を營しに、ある日駒形岩の邊鶴淵の底より龍神出て大衆を饗應す、中に九穴の貝あり、人怪て食はず道に棄しを勝道捨て家に歸る、此比丘尼探て食しゆえ壽を保てりと云、此説縁起と異なりいづれも來歴證とすべきなし。	会津藩官選の地誌
2	寛文6年 (1666)	『会津風土記』 「金川寺」	在金川村。八百比丘尼建之。自刻弥陀像。置焉。前淵曰鶴淵。側有二石、其形似馬。尼詠歌曰、阿比豆也麻 布毛登乃佐登農 阿弥陀多宇 加須美加久礼之 都流布知之古麻。尼者、世之所謂、若州白子比丘尼也。	保科正之立案により 編纂
3	寛文12年 (1672)	『会津旧事雜考』卷八	河沼郡代田村弥陀寺焚也。伝曰、此寺、昔若狭八百比丘尼草創。手刻弥陀像安置。尼者、若州小浜之産、而長寿也。故為名云。且金川邑金川寺、亦尼創也。彼村主石井丹後時也云。然年序未詳。	保科正之の命により 家老柳瀬正真が編纂
4	文政11年 (1828)	『新編武蔵国風土記稿』卷之百五十四	(水判土村) 慈眼寺 地藏堂。黄金佛にて長一寸八分、傳へ云此像は八百比丘尼の守護佛にて、壽地藏と呼べりと。門外に石標を立て共舊跡なることを示す、此像も中古荒廢より以來、何れへか失ひて見えざりければ、代々の住僧深く是を愁へ、諸方を尋ねけれども求め得ざりしに、享保年中はからず境内土中より掘出せしと云、其語り岩洞の内に安じ、岩の裏に孝の字かすか見え、其左右に八百比丘尼大化元年とありしよしなれど、秘佛なりとて見ることを許さず、又かの尼が手づから植し木あり、先年枯れて今二王門の庇の下に片寄てあり、太さ五圍に餘り、木理櫟の木と見ゆ、彼尼が植たることは姑く置いて、いかさま數百歳をへしものと思はる、さてこの尼は上古若狭國にありて、常に延命地藏を信じ、一千の小石を集めて多年の供養を重ねしかば、其功德により悟道徹底し、遂に人間の塵縁を免れ、妙齡不老にして八百歳の壽を保てりと云、或は云彼尼は若州小松原の産なりしが、幼時父海濱に釣して怪き魚を得たり、即ちこれを食はしめしに、夫より年を重ねるといへども、容貌衰へず、同國後瀬山の麓空印寺境内の岩洞に隠れ住、遂に八百歳に及ぶ、故に人呼でかく名付くと、肌膚至て白かりければ、一に白尼ともよぶ、寶徳年中洛に至り、常に源平盛衰のさまなど、面のあたり見たりとて物語せしと云、寶徳より大化元年まで八百年に餘れば、計へ来てかくは呼しなるべし、いかにも妄誕の説に似たれど、舊く云傳ふることなれば、若狭國志等によりてほぼその傳をしるしをきぬ。	昌平坂学問所地理局 による事業で編纂

松尾芭蕉の句碑と語られる伝承 — 江戸時代建立の句碑を基にして —

玉水 洋匡

はじめに

東京都豊島区目白に学習院という学校がある。その敷地の一角に松尾芭蕉の句碑が建っている。松尾芭蕉が晩年詠んだ「目にかかる時やことさら五月富士」の句が刻まれている。傍らに設置されている案内板によれば、この句碑は江戸時代の文化七年（一八一〇）に地元の俳人である金子直徳によって建立されたのだという。建立された当時はこの地に富士見茶屋があり、多くの人々が訪れたという。現在は木々が生い茂ってしまい、ここから富士山を見ることはできないが、付近の建物を「富士見会館」といい、名称にその名残を留めている。学校の敷地となったために、富士見茶屋はすでに姿を消し、伝承は変容してしまっているが、学校と民間伝承のつながりを認めることはできる⁽¹⁾。

本稿の目的は松尾芭蕉句碑とその周辺における伝承を明らかに

にしていくことによって、松尾芭蕉句碑を口承文芸研究という切り口で考察していく意義を提起することにある。松尾芭蕉句碑は単に、刻まれた松尾芭蕉の句と建立者、建立年が明らかにされるだけの遺物ではない。なぜこの場所に句碑が建てられたのか。なぜこの句が選ばれたのか。なぜ現在までこの句碑が受け継がれてきたのか。なぜこの句碑にまつわる松尾芭蕉の伝承が語り継がれているのか。そこには松尾芭蕉句碑に関わる人々の想いが込められていると考えている。これらは口承文芸研究で明らかにすべき領域であるか否か具体的事例を基に検証していきたい。

本稿では先述した目的を果たすために、江戸時代に建立された、もしくは江戸時代に建立された句碑を基にした、松尾芭蕉句碑を事例として取り上げる。江戸時代に限定する理由は伝承の経過を観察するためである。建立された当時の背景と、現在の様子と比較検討していく。また詳細は後述するが、実際に筆者が現地を訪れ、調査することができた句碑のみを事例として